

# 近藤有美ゼミ活動報告書

JAN. 28

## TOP MESSAGE

## 今学期の活動



今学期も1期と同様に、山本冴里編『複数の言語で生きて死ぬ』を読み、読んでいた時に生まれた疑問や考えたことを持ち寄り、ディスカッションを行いました。

また、今学期はゼミ生が担当する章を決めました。担当の章のディスカッションでは、ハンドアウトを作成したり、司会進行を務めたりしました。それぞれが1期よりも主体的に関わる形で話し合いを行うことができました。

## TOPIC

## 取り扱った章と担当

- ・第9章 「韓国語は忘れました」  
一人にとって母語とは何か (河本)
- ・第5章 「あいだ」に、いる  
一言語の交差域への誘い (大橋)
- ・第10章 こうもりは裏切り者か？  
一人者のことばを使う (小出)

- ・第8章 内戦下、日本語とともに生きる  
一ことばを学ぶ意味 (犬飼)
- ・終章 複数の言語で生き死にすること  
一人間性の回復をめざして (新垣)  
(ディスカッション実施順)

## EVENT

## 山本冴里先生との対話セッション

**2026.01.15 (2限) at 日進キャンパス**

私たちがゼミで1年間読みこんできた本の著者である、山本冴里先生とオンラインで対話セッションを行いました。本を書くきっかけをお聞きしたり、わからなかったことを質問したりして、良い対話ができました。

私たちの1年間の活動のまとめとなる、有意義な90分間でした。



## REPORT

## 活動報告書について

この活動報告書では、それぞれの学生の①授業のディスカッションから感じたこと、②山本冴里先生との対話セッションの感想、③1年間のゼミの活動を通しての自分の変化や感じたことをまとめます。そして、①は各章ごとに感想をまとめます。

また、対話セッションで、山本先生に「可能な限り話しことばで書いてみてください」というアドバイスを頂いたので、全ての感想を方言などの話しことばを用いることにしました。

## ゼミメンバー

- ・ 23052002 新垣琉華
- ・ 23052006 犬飼夏海
- ・ 23052010 大橋芽奈
- ・ 23052014 河本日菜子
- ・ 23052017 小出百美

## 一 「忘れさられた言語」の韓国語と「歩み寄ることば」の韓国語

## 〇〇語と区別することができない、自分のことば

シホさんは、韓国からの海外養子でデンマークの家族を持つ。彼女にとって韓国語は「忘れさられた言語」であり、母語ではない。しかし両親は、子どもの時から彼女に、間違いを含みながらも韓国語で話しかける。両親にとって韓国語はシホさんに「歩み寄ることば」なのだ。また、シホさんは日本語学習者として「日本人のような日本語」ではなく「自分の日本語が上手になる」ことを目指す。日本語は彼女にとって必要な言語であるだけで、外国語ではない。それぞれが持つ言語で自分らしく生きることが重要だと語る。

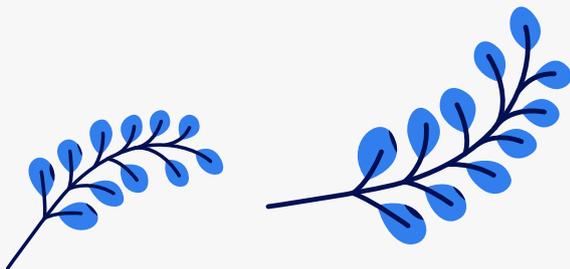
愛知に来てよ、方言が通じないことに気付いてからに、沖縄の人以外とは標準語で話すようになったわけさ。でもよ、沖縄出身って言ったら「方言喋って」とか「はいさいでしょ?」とか言われるわけさーね。それでなんか喋って相手がその言葉を繰り返したら、やっぱネイティブじゃないからちゃんと言えないわけよ。それがシホさんが感じた違和感と似てるなと思ったや。でもよ、そこで正しさを求めるんじゃなくて、歩み寄ってくれてるってことをちゃんと自分が理解することが大事なんだってわかったさ。(新垣)

歩み寄るためにことばを使えたらいいなって考えるようになった。国と言葉とか、人の見た目と話す言葉とか、簡単に想像して結び付けちゃうけど、それは危険な考え方だって実感した。ディスカッションをしていて、私のお母さんが職場でペルー人に「ペルー語を話すの?」と聞いて、不快な思いをさせちゃったっていう話を思い出したじゃんね。日本では日本語を話すから、それぞれの国にその国の言語があると勝手に思い込んでたんだと思うわ。それを聞いて自分も気をつけようと思ったし、その人のことばとして受け止められる人になりたいと思った。(小出)

ここでいう母語は、言葉として明確に使えなくなった後も、感情や記憶、身体感覚に深く結びついて残る存在であると認識した。言語は単なるコミュニケーションの道具ではなく、その人の生そのものに組み込まれているものやと感じた。母語とは何語か、と単純に区別できない「自分のことば」があるという視点は、私にとって言語と人間の関係をより深く考えるきっかけとなった。(大橋)

「日本語が上手になる」って「自分の日本語が上手になる」ってことやん。当たり前のことかん知らんけど、つい「日本人のような日本語」と混同してしまつとる気がする。これは自分が外国語学ぶときもそうやし、人が外国語学んどるとこに教えたりとか介入するときにも忘れちゃいかんことやな思ったわ。(河本)

私のアルバイト先は都会にあつて、外国人めっちゃ来るんよ。今までは英語話しとけばコミュニケーション取れるかって浅い考えだったんよね。でも、そうじゃないって思った。共通語の英語を話すことがベストじゃないって分かった。だって、英語が第一言語じゃない人の方が多いんよ?じゃあ、その人にどうやって伝えるかを考えることが1番寄り添うことになつとるじゃんね。だから、最近ではその人の第一声を聞いてからどうやって話すか考えるようにしてる。英語を使うのか、日本語を使うのか、単語で話しながらジェスチャーとかで伝えるのか、いろいろあるんよ。もつと歩み寄ることばを使えるようになりたい。(犬飼)



## 一 「あいだ」とは？ どちらにも属し、どちらにも属さないとは？

## 「あいだ」にいる人たちを知り、自分の「あいだ性」を振り返る

異なる言語や文化、立場の「あいだ」に生きる人々の事例を通して、その存在の意味が考察されている。『宝島』では沖縄の戦後の歴史の中で「あいだ」に置かれた人々の姿が示されている。また、『デフ・ヴォイスー法廷の手話通訳士』では、ろう者と聴者の世界の双方に関わる人物の葛藤が描かれ、『ジャッカ・ドフニー海と記憶の物語』では、民族的背景の異なる人々との出会いを通して「あいだ」に生きる主体の経験が表現されている。筆者は、「あいだ」にいることを、どちらにも属しながら完全には属さない状態とし、その背景を学び自らの「あいだ性」を見つめ直すことの重要性を指摘している。

今まで考えたことなかったもので、「あいだ」って何？ってめっちゃ考えたじゃんね。先生やみんなのおすすめで、何年かぶりに映画館に行って『宝島』を観ただに。映画を観ながら、「今この人はどんなあいだにいるのかな」って考えとったのは、たぶん私だけだと思う。あいだにいる主人公たちは葛藤しとった。どちらにも属してどちらにも属さないことは楽じゃない。でも、楽じゃないからこそ、あいだは安全な場所として維持されてるのかもしれない。1つ気になったのは、主人公達は英語を話せるようになっていったのに、アメリカ軍の人たちは最後まで日本語を話さなかった。言語の強弱が気になるようになっていったな。(小出)

第5章を読んで出た結論は、「あいだ」ってなんやろう。印象に残ってるんは、「宝島」だがんね。米軍基地と沖縄を隔てる「線」はどんなものなんやろうとみんなで考えた。会話ができたということはきっと、鉄でできた網目が広いフェンス。見えるし聞こえるし触れられる。あちらとこちらはコンクリートでできた壁だけではないということを学んだ。第5章では、一つの言語や文化に完全には回収されん人々の在り方も学び、私たちは日常でいくつもの「あいだ」を選択しながら生きてると実感した。私は、なんやろうって思えることが大事やと思う。そうして自分の立場を日頃から振り返っていきたい。(大橋)

この章を読んで印象に残ってるのは、やっぱり「宝島」だや。「あいだ」が何か考えたこともなかったけどよ、「宝島」を見てから自分の腑に落ちるものがあったて、自分も「あいだ」にいるなーって思うようになったわけよ。あとさ、「小さな恋のうた」っていう映画があるんだけどさ、第5章を読んだあとに見たら見方が変わってよ、考えさせられたからみんなにも見てほしいさ。おすすめど。(新垣)

自分の「あいだ性」は方言やと思う。自分の言葉の大部分は関西弁や思っとる。でもこれを関西弁っていう人も関西弁やないっていう人もおる。これに悶々とすることもあってんけど、今やったら「自分の関西弁は、大阪弁、和歌山弁、兵庫弁のあいだにおる。でもこれも関西弁や。」って自信持って言える。方言の中にも多様性があることに気づいてほしいわ。(河本)

「あいだ」って何だろう、日本人の両親から生まれ日本で生まれ育った自分には関係ないことだって思った。でも、自分も知らないうちに「あいだ」にいたんよね。私は海外に行きたいってめっちゃ思ってたけど、大学生になって海外に行くようになってから、日本も悪くないなって思うようになってたんよ。今では機会があれば行きたいしなければ日本で暮らし続けるのも悪くないなって思うようになっていった。ちょっと章の意味と違うかもだけど、どっちの考えも分かるようになって、これが「あいだ」における感覚なのかなって思う。どっちにも変われる、寄り添えるって状態に入って、落ち着いたように思った。(犬飼)



## — 「敵か味方か」「あちら側とこちら側」2つの世界を生きるこうもり

## 私たちはどうしたら異なる世界をつなぐ者になれる？

複言語能力を持つ人が、鳥からも獣からも追われるイソップ寓話のこうもりのように葛藤の中に置かれる姿が描かれる。小笠原諸島の欧米系移民への英語敵視などの戦時中の英語使用制限、北方領土に派遣された日本語教師の経験、ペティナ・ガッパの短編小説『和解』の例が示されている。2つの世界を知る「こうもり」が直面する葛藤と、その存在の意味を問い直す。

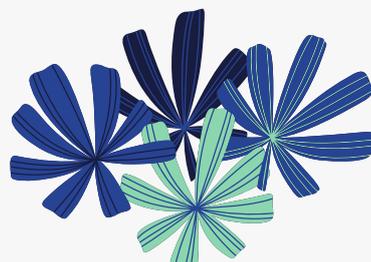
イソップ寓話「鳥と獣とコウモリ」。自分の身を守るためにコウモリなることもある。でもあっちとこっち両方入れて、仲介者みたいに世界つなぐもんにもなれるやん。簡単にどっちかん世界に留まるんちゃうくて、自分の立場を保って、自分にできることをやっていきたいわ。(河本)

この章で登場した「日本海／東海（トンへ）論争」。K-POPが好きで韓国に興味がある私も、この論争に触れたことがあったじゃんね。外務省のサイトを見ると、日本は間違ってますとしか書いてなくて、でもそれだけを見たらそうなんだって思っちゃう。やっぱり「あちら」のことも知らないと、こういう問題を本当の意味で理解することってできんと思う。こうもりみたいな人になれたらどがっこいいよね。あちらとこちらだけじゃなくて、そのあいだも知ってるってすごいって思わん？歩み寄る方法っていろいろあると思うけど、まずはいろんな世界を知ることから始めてみるわ。(小出)

異なる言語や文化を行き来する人は、常に立場の不安定さを感じる。やけどその不安定さゆえに、一つの価値観に回収されず、他者の視点に寄り添うことができる。私たちが異なる世界をつなぐ者になるためには、どちらか一方に立つことよりも、「あいだ」ととどまる覚悟が必要なのだと感じた。つまり私は、コウモリになりたいっちゃうことだがね。(大橋)

この章読んだときによ、沖縄戦の話思い出したわけさ。あるガマで投降を促した人がいてから、その人のおかげでそのガマにいた人たちは助かったわけよ。この話は「ことば」は関係ないかもしれんけどさ、米軍が住民には何もしないってことを知ってたから助けることができたわけ。住民からしたらよ、投降したら殺されるって思ってるから、その助けてくれた人のことを最初は裏切り者だと思ってるさ。でも、その人が2つの世界を知ってたから多くの命が助かったわけよ。だからさ、自分も沖縄と愛知をつなぐ者として、これからは生きていこうね。(新垣)

「鳥と獣とコウモリ」の話は知らなかった。だから、最初読んだ時、コウモリ自業自得じゃんって思ったの。都合よくだまして鳥の仲間、獣の仲間になったんだからって。でも、授業の後にはコウモリの存在って大事なんだって思うようになったんよね。同族しか受け入れんかったら他の情報は入ってこんし、自分たちの良さも知れんよ。でも、コウモリっていう存在を排除しなければ鳥は獣の獣は鳥の情報が得られるんよ。だし、偏見で認識せずお互いの良さに気づくきっかけにもなるはずなんよ。だから、コウモリっていう存在は世界中の人がひとつになるためには欠かせない存在だし、みんながコウモリであってつむぎあっていけばいいなって思った。(犬飼)



## — 生き抜く希望の日本語、「日本語を教えること」＝「自分を伝えること」

## 「学ぶ」意味とは？ 「教える」こととは？

内戦下のシリアで日本語を学び続けたマリアムの姿が描かれている。内戦が深刻化し、日本語教師である筆者も日本に戻りマリアムさんは孤独な状況に置かれてしまう。そんな中で、彼女にとって日本語は恐怖を一時的に忘れさせる「心の避難所」となり、夢や希望の象徴だった。ことばを学ぶことは、戦争とは別の「もう一つの日常」を生きる手段となり、筆者はマリアムの姿から「ことばを学ぶ意味」を問い続けることになる。

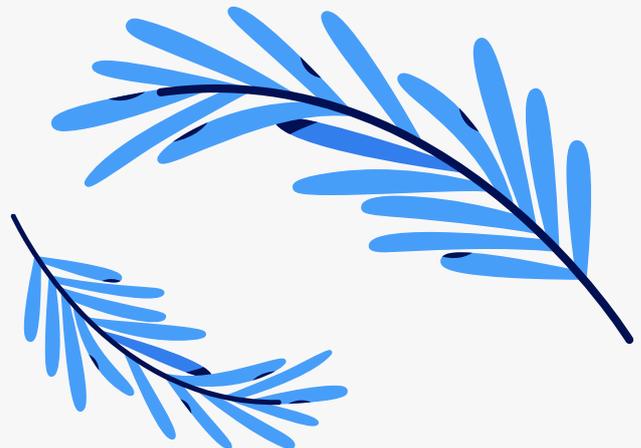
「日本語を教えることを『自分を伝えること』』としとるんが印象的やった。自分の発言は全て自分の経験に基づいとる。やからこそ、どの経験からそう考えてしまうのか常に考えていきたい。そんで今時間ある中で、より多くの経験をして、学んで、自分を磨いていきたいわ。(河本)

マリアムさんの言葉はすごく印象的だった。日本語に対する思いが私とは全然違った。内戦が起きて、派遣された日本人はシリアから退避させられた。急にあちらとこちらが作られるって、なんか残酷で、どこまで守るのかってことの難しさを感じた。この章をやっていると、私は日本語教育実習を学内でしとっただけど、マリアムさんみたいに「命の意味がない」くらいの思いを持ってやっとなかったじゃんね。言語を教えるじゃなくて、自分の言葉で伝えることが大事だなって思った。もっと国外の出来事にも興味を持って、自分にできることがあるのか考えんといかんね。(小出)

ことばを学ぶことは、文法や単語を覚える以上に、自分の思いや経験を誰かに伝えて、世界ともう一度つながる行為なんだと知った。また、「日本語を教える」っちゅうのも、知識を与えるだけじゃなくて、相手の存在そのものを認めることにつながるとる。私も外国語を勉強しとるけど、話せるようになりたいとか将来のためとかだけじゃなくて、「自分を外の世界に伝えたい」っちゅう気持ちがあることに気づいた。言語を学ぶことは生き方そのものに関わるとるし、教えることもまた、他人の人生に関わる責任重大なことなんやと感じたわ。(大橋)

第8章は、マリアムさんの熱意に心打たれたよや。教員を目指してるのによ、自分がなんで教えたいのか、教員になりたいのかっていう根本の部分をあんまちゃんと考えてなかったさ。だからよ、マリアムさんが日本語を教えることにちゃんと意味を持ってやってて感動したわけよ。自分は沖縄と愛知の「あいだ」だからこそ、自分の中にあるものをちゃんと教えていける先生になりたいさ。(新垣)

私は「日本語を教える」っていうのは、日本語を勉強したい人のために教えるっていう部分しか正直考えたことがなかったんよ。でも、マリアムさんの話を読んで、言語を教えるってのもっと深いんかなって思った。だって、今まで使ってきた言語を誰かに教えるんよ？21年間切っても離せん関係にあるんよ？日本語とどんな関わりしたかって自分にしか分からんじゃんね。マリアムさんの場合は、生まれながらに話してたわけじゃないけど、勉強したきっかけとか心境も自分にしか分からんもんね。この章のおかげで自分が知識以外に何を伝えたいのか考えるきっかけになった。(犬飼)



## 一 支配-被支配などの関係性から自由になることはできない

## 自分とは何者か？ → 社会において何ができるのか？

本書全体の内容を振り返って、「複数の言語で生きて死ぬ」とはどういうことなのかについて述べられている。第1～10章に登場するさまざまな物語に共通しているのは、植民地や戦争、差別の中に存在する「支配-被支配」という関係である。この関係の中で、「集団から個へ、対等と自由のための境界」つまり、それぞれの言語を学んで使うことで対等で自由な関係性を築ける可能性を示している。これが人間的な行為であり、これによって傷ついた共生社会が回復に向かっていくと筆者は主張する。

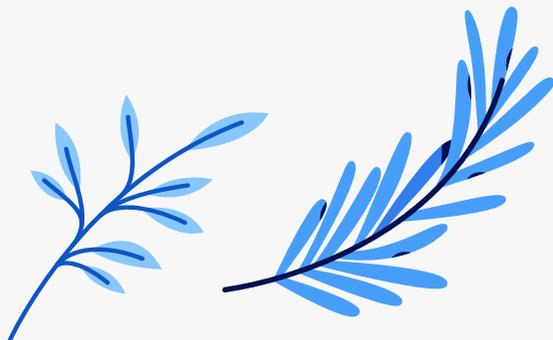
私は、初対面の人でもウェルカム！って感じでしゃべれるけど、やっぱり、相手をそのまま受け入れることはできとらんとする。知らんうちに、「こういう人」っていう枠組みに押し込めとるかもしれん。「ことばによって活動することは、人間性の回復を目指すこと (p.198)」って細川先生は書いとるけど、私たちは傷ついたり、傷つけたりすることに敏感になりすぎてるのかもしれないね。別に人と違っていいじゃんね！何で同じじゃないといかんのか？ってという考えを持ってたら、違いつて簡単に受け入れられるんじゃないかな。だって、みんな違うんだもん。それがその人をそのまま受け入れるってことなのかな。(小出)

歴史上、支配されて言葉が制限がされたってことがいっぱいあると思う。情勢的に支配というものは辛いものだと思う。でも言葉に関しては支配されるってことはそんな悪いことじゃないんかなってちょっと思ったんよ。自分の言葉が自由に話せなくなるのは辛いけど、他の言語との出会って考えるとポジティブに思えるがね。それに、その言葉と向き合えば生活が変わるかもしれんのかな？支配つね考えて暗くなるより考え方を变えることが大事なんなってる。いろんなことに興味を持って価値観とか豊かにしたいなって思った。(犬飼)

世界には色々な人がおる。様々なルーツを持つ人、豊かな言語体系を持つ人、持たざるを得なかった人。自分ん中にも色々な言葉や文化があつてそれが移り変わるように、社会も人も固定的やなくて流動的やんね。このことを忘れんと、もっと色々な人に会つて豊かなコミュニケーションを築きたい。そしてもっと自分自身も豊かにしていきたい。なんか人と関わるってこんなにもわくわくするもんなんやね。(河本)

今まで「自分って何者なのか」って考えたことなかったよや。でもよ、沖縄を離れてから沖縄がどれだけ自分にとって大きな存在なのかとか、違う環境にいるからこそ見えてくる自分の姿がだんだんわかってきたわけさ。だからよ、自分が感じたことを周りに伝えていきたいし、できればよ、違う環境に足を踏み入れて自分で「違う」ことを感じてほしいって思うさ。そしたら、「違い」を知れるし、それを受け入れて適応しようとするから成長できるばーよ。(新垣)

複数の言語で生きる経験を通して、人は一つの姿だけで成り立つとる存在やないちゅうことが示されとる。使う言語や置かれとる状況によって、考え方やふるまいは変わって、人は常に複数の自分を生きると言えるがね。そう考えると、居場所ちゅうのは一つに固定された場所やのうて、揺れとつてもおれる空間のことだと考えられる。「あいだ」に立つことは簡単やないけど、それは他者との関係の中で生きていく上で、どうしても避けられん状態でもある。複数の言語を生きることは、人間の複数性を受け入れて、新たな居場所を見出すための実践だと思ふ。(大橋)



その時出会った言葉、感じたものを書き留めておくのむっちゃ素敵だな思った。その時のことは、やっぱ忘れてまうし美化されてまうから、残さなあかん。そして残しておいたもんが、バラバラなもんやったとしても、いつか線につながったり、ひとつがきっかけでずるずる引き出されたりした時、きっと何か感じるものがあるんやと思う。自分も今年から山本先生みたいに、その日その時のものを残していきたい。(河本)



何かを考えるとき、自分と違う意見を探すってというのは意外だった。知らないことを知って、すごく自分のためになるんだなって思った。正解を見つけるためじゃなくて、自分の意見を持つために、いろんなことを知らなきゃいけないんだなとも感じた。みんなで考えるきっかけを作るという先生の活動もすごく参考になった。答えの出ない問題は答えを出す必要はないってこと、いろんな意見を持ち寄って考えることが大事なんだとわかった。(小出)

山本先生は、話すときに考えながら話してて、それが印象的だったやっさ。自分はディスカッションの時とかに、その場で考えてから話すことが苦手だからよ、ある程度考えてからじゃないと話せんわけよ。でもそこで考えられるってことは、内容につながる何かをいくつも持ってるからだと思うわけさ。自分は考えてるけどさ、それを言葉にして話すのが苦手だからよ、考えながらも話すってことを意識していきたいって思ったや。自分の中で引っかかったものを書いといてからに、それを残しとくって実は一番大事なんじゃないかや。(新垣)

ほんつとうに貴重な機会だった。私は去年山本先生のシンポジウムに参加したけど、言語についての考えはそんな深まったらんかったし分からんこともいっぱいあった。メモだけしてあったから振り返るけど、分からん自分のメモだったからちょっと内容が途切れ途切れだったんよ。だから、ゼミのこと踏まえてシンポジウムに参加したかったって気持ちが本当に強かったんよ。でも、今回90分っていう時間だったけど先生からお話聞けてめっちゃ面白かったんね。全然わからん話っていうんはなかったし先生も考えながらみんなで話し合えたのが楽しかったんよ。特に先生の子供の話が興味深かった。先生みたいに日記をつけて言葉に囲まれてるっていうのを忘れずにいたいなっておもった。(犬飼)

山本先生との対話は体感10分やった。ほんまに時間があつちゅう間にすぎるし、書きたいことと頭と書きたいことが同時になって頭がぐっちゃんこになつとったけど刺激を受けたじゃんね。特に興味を持ったことは、何かについて話し合う時の条件についてである。「正解を目指さないこと」そして「相手を説得しようとしなないこと」この二つである。無意識に私は自分の意見の正当性や的確性を探していた気がする。そうではなく、考え続ける。そのために自分の意見との反証を探すことを徹底しようと決めた。(大橋)

考えて考えて、後半になるにつれ良いこと悪いことどちらにも欠点や見落とししている部分があり、わからなくなりました。今までの私ならば、正解が出ず焦ったり落ち込んだりしていました。

でも前向きな「わからん」に変わりました。だって考え続けられればいいんだから!!! ほいで答えとか正解とか正論とかそんなんじゃないくて、少しの余裕と物事に対するがむしやらしさがあれば、色々な「わからん」と共存し続けることができると思います。「わからん」からこそ良い。それもまた豊かになる第一歩。不完全で言葉選びが下手な私だって、世界中の誰だって、立派な言葉の魔法使いなのである。(大橋)

「複言語複文化主義」。個人の中に複数の言語体系や文化が入り混じるとるんやって言葉で言うんは簡単やけど、本を通して、みんなで話したりそれぞれの経験から考えたりして、「複言語複文化主義」って何なのか、どういうことなのか、言葉に含まれる意味がやっと思えてきた気がする。ひとりひとりに豊かさがあるんやから、固定観念に縛られんと、集団ではなく個人として向き合って、関わっていくことをもつと楽しんでいきたいもんやね。(河本)

なんか本当に濃い1年だったなって思った。1年前の自分なんて絶対言語について聞かれても上っ面なことしか言えんかったに?今も完璧ではないけど自分なりの考えを話せる自信はついたかなって思つとる。正直まだふわあって理解しとる部分もあるから考え続ける必要はあるんけど、みんなとそれを共有しながら進める授業は楽しかった。あと、言語って人の数分あるんだなって実感できるようになったんよ!言語ってその人が考えて選んで、言葉として発したり、身振り手振りで表したり、目とか声とかからでたり、いろんな要素があるんだなって思った。だもんで、その人がその言葉を使つとるってことが1番大事なんだって思うようになった。(犬飼)

言語化するのが難しいことばかりだったけど、人と考えを共有するのは面白かった。何を考えてるのかわかんないってよく言われるけど、それは私の伝え方に問題があるってことじゃんね。考えを伝えるって本当に大変なことだなって改めて感じた。

あいだという場所を知ってしまったから、新たな視点で物事を見ることができるようになった。小さい頃「よそはよそ、うちのうち」ってよく言われとったけど、うちの中にも違いってあるじゃんね。グループ分けしたくなる生き物だけど、その中にあるもつと細かい複数性を忘れちゃいかんと思うようになった。「また変な事言つとるわ」って言われるのかもしれないけど、そんなん言われたって、そういうもんなんだでいいじゃん!って言える自分でいたい!(小出)

1年間を通して「複言語複文化」について考えて話し合ってきた、やっと思、大学に来た意味があるって思えるようになったば一よ。なんでかやっと思えたらよ、「複数の言語で生きて死ぬ」っていうのを知れたからだと思わけさ。沖縄で教員になったら、生徒に「ことば」について考える時間をで一じいっばい作つてあげたいって思うようになったわけ。沖縄から出ない子が大半だからよ、自分が話せることは全部話して、そのうちのなんかが引つかかってくれば嬉しいさ。あと1年で吸収できるものは吸収して沖縄に帰ろうね。これは関係ないけど今「沖縄からアジアが見れる」っていう本を読んで、「方言札」とか出てくるから、もし興味あつたら読んでみて!(新垣)

☆ 2026.01.15 PIZZA PARTY ☆



来年度もよろしく  
お願いします!